



上図は厚生労働省の「国民生活基礎調査の概況」の最新版となる令和5年版(2022年版)から都市別の年代別喫煙率データから作成されたグラフです。

どの都市も40歳～50歳代が高く、20歳代・70歳代で低くなっています。各都市を見比べると人口が多い東京の喫煙率が特に低く、どの年代でも30%を下回っているため、多くても10人に3人しか喫煙者がいないのです。多くの人が暮らす都会ではタバコの被害を意識する機会が多いのでしょうか。

そしてもう一つ、全国的に20歳代の喫煙率が低い事にも注目してください。「最近の若者はタバコを吸わない」傾向が定着しつつあるように感じます。皆さんのように、タバコの有害性や不便性などを知ったうえで成人を迎えている人が増えているからだと思われます。見方を変えれば、それを知らずにタバコを吸い始めてしまった年代の喫煙率が高いのでしょう。

タバコを正しく知ったうえで成人する人ばかりになれば、「最近では誰もタバコを吸わない」と感じる時代になるかもしれません。